

野本寛一著 『地霊の復権 自然と結ぶ民俗を探る』

藤井弘章

衝撃的なタイトルである。野本氏の生業論、環境論に関心を持っていた読者のなかには、このタイトルに違和感を持つ方もいるのではないかと思われる。しかし、著者は決してオカルトに走ったわけではない。サブタイトルにあるように、主眼はあくまで「自然と結ぶ民俗」なのである。

冒頭でまず紹介されるのは、著者が飛騨で聞いた、家を建て替えるときに、一旦屋敷地を自然に帰すという「菘蕎麦三日」の話である。蕪や蕎麦は三日で芽が出る。芽が出れば、屋敷地は自然に帰ったことになり、それから基礎工事にかかるという。これを聞いたときの著者の感動が想像される。このような話は次第に聞

くことが難しくなってきた。反対に、終章で紹介されている、北五島で見た、主を失った屋敷地がコンクリートで固められている事例には、胸苦しい思いをしている。現在では、こうした光景のほうに、残念ながら目にする機会が増えているのは事実である。

著者は、全国各地を精力的に歩き回っている。地を這うような調査から、常々感じてきた思いをぶつけた、本書はそういう内容となっている。とくに、平成一七年三月に北五島・野崎島を訪れたところから、廃家の屋敷神や、過疎のムラの、人気の遠のいた民俗神が気になり始め、地霊について考えるようになったとある。現代のわれわれは、土地の声、自然の声をあまりにも

無視しているのではないか。そういった疑問がふつふつと湧いてきていたことであろう。

「はじめに」で記されているように、「廢家が増え、廢れ、消えゆくムラムラが増してゆけば、特定の場に凝集された地霊や、小さな民俗神は、梯子をはずされ、忘れられ、やがて忘却の淵に沈むことになる。」という現象への嘆きが、著者にこの本を書かせた原動力になっていられると思われる。しかし、著者は嘆いているだけではない。「先人たちが、地霊・精霊・小さな民俗神に感応した感性・心性・感応力を少しでも甦らせてみたい。」という。この列島にみられる自然と結ぶ豊かな民俗を、もっと広く知ってほしいという切実な願いが伝わってくる。

本書の魅力は、要点を示すだけでは伝わらないというところを承知のうえで、まずは本書の構成を示し、章ごとに概要を述べておく。

序章 地霊の相貌

I章 地霊の嘆き 開発と忘却

II章 地霊の称揚と鎮め

III章 地霊探索の試み

IV章 信仰空間を歩く

V章 森と環境伝承

VI章 地霊と死霊

終章 地霊と環境

まず「はじめに」では、地霊を取り上げる意義を述べており、序章では、そもそも地霊とはどのようなものなのかということ、津軽、南信、南山城、沖繩・国頭などの事例を提示して説明している。

I章では、山梨県、長野県、岩手県の事例を示しながら、各地の地霊の嘆きを提示している。この章には、地霊が無残に打ち捨てられている事例が多数取り上げられており、寂寥感が漂っている。

II章では、一転して、先人たちが地霊とどのようにかかわってきたのかを述べ始める。まずは、枕詞や地名から、地霊の活性化、鎮撫の事例を紹介している。その後、相撲のシコ、奥三河の花祭りの反閨、四万十

川の河口閉塞を防ぐ相撲、遠州・見付天神祭りの練りなどの事例を挙げて、地面を踏みしめることで、地霊を鎮める事例を提示している。

Ⅲ章では、滋賀県の野神、山梨県の道祖神、三遠南信地方や九州のガラン信仰、阿波のオフナトさんなどを取り上げ、地霊の多様な顔を紹介している。たとえば、野神については、「野を畑地に転換するに際して、抑圧された地霊を祀り鎮めたものである」と分析している。地霊の本質に迫ろうとする試みである。

Ⅳ章では、個別の地霊だけではなく、一定の空間的広がりの中で、それらがどのように連鎖しているのかを述べている。具体的には、北五島、遠州・荻間川流域、南信・遠山谷、南信・伊那谷における信仰空間を提示している。

Ⅴ章では、地霊の拠りどころになっている各地の森について述べている。自ら見出した、開発のなかで意識的に残された森について紹介したあとで、若狭のニソの森、薩摩のモイドンなど、民俗学では有名な森の事例を取り上げている。さらに、鳥獣霊の森、神々の

森、防災の森、救荒の森、という森の多様な側面について紹介している。

Ⅵ章では、伊勢の朝熊山、熊野の妙法山、津軽の川倉賽や仏ヶ浦の事例を取り上げ、地霊と死霊との関係を述べている。

終章では、地霊を思い、大地に感謝する時間をもつ必要性や、アニミズムの世界への感性が、人を蘇生させる力があるということも述べている。

本書の概要を示せば、以上のようなになる。

地霊とは何か。本書には明確に示されていない。したがって、本書を読んでいくうえで、多少分かっていざもあるように思う。著者自身、以下のように述べている。「地霊を厳正な線引きで囲いこむことは困難」であり、「地霊・精・精霊・モノ・ヌシ・小さな民俗神などは時に複合し、錯綜することもあり、仕分けや概念規定はむづかしい」。地霊の概念規定は、著者の意図するところではなかった。この問題に首を突っ込むと、間違いなく大変な作業が待ち受けている。とり

あえず、「地霊」としてくくつておき、先へ進みたい、そういう思いがにじみ出ている。したがって、この小文でも、この部分には踏み込まないこととする。

本書の迫力としてまず挙げられるのは、事例の豊富さであろう。全国的にさまざまな事例が次々に紹介され、説明が加えられていく。著者の得意とする方法である。そして、その事例のほとんどが自ら歩いて見聞きしたものであるということで説得力を増している。文献も用いる場合はあるが、基本的には自ら直接歩いて見て聞いた事例である。

写真の豊かさにも相変わらず圧倒される。著者の著作では、いつも写真の比重が高い。今回も、多数の写真が、地霊のさまざまな様子を伝えてくれている。ただし、口絵写真には忘れ去られた地霊の写真は見当たらない。ここには、現代社会を嘆いているというだけではない、著者の未来へのメッセージが込められているように思う。

しかしながら、圧倒されるほどの事例ではあるが、全国で均等に取上げられているわけではない。事例の取

り上げ方が恣意的である、という批判も聞こえてきそうである。たしかに、全国的な傾向を知りたいという気持ちは出てくる。これだけ歩いていての方であるからこそ、地霊に関する全国的な視野からの地域差を知りたかったとも思う。おそらく、全国をくまなく歩いてくる著者であれば、全国的に地霊を列記し、地域的な分布や特徴を述べていくことも可能であったと思われる。しかし、本書ではあえてそれをしなかった。それは、おそらく、記憶の新鮮な事例を素材として、読者に迫りたかったという著者の意図が現れているように思う。

本書ではかなり以前の調査で得た事例の引用は限られている。ほとんどの事例は、平成二〇、二十一年ごろの調査で得たものとなっている。驚くべきことである。野本氏は平成一九年三月に近畿大学を定年退職されている。七〇歳を越えてなお、すさまじい勢いで全国を歩き回っていることがよく示されている。たとえば、『熊野山海民俗考』（人文書院、一九九〇年）で取り上げられた熊野の丸石などは、本書では言葉のみ記述が

あるものの、事例としてはまったく触れられていないのである。一見、恣意的な事例の取り上げ方に見えるが、そこには現在もおこなわれている、そして、現在起こっている現象を讀者に知ってほしかったという著者の願いが込められているように思われる。

本書で取り上げられる事例としてとくに多いのは、長野県南部、静岡県西部である。この地域の事例を本書全体にちりばめ、そのうえに適材適所で各地の事例を提示する、という方向性を持っている。長野県南部の南信、静岡県西部の遠州は、愛知県東部とともに、三遠南信と呼ばれる。この地域には、霜月祭りや花祭りに代表されるように、伝統的な芸能などが見られるとして、柳田国男、折口信夫、渋沢敏三などが注目し、通った地域である。著者自身は、本書にも記されているように静岡県牧之原市の出身である。遠州の東の端になる。赤坂憲雄氏は、著者・野本寛一氏の行動範囲が東北日本から西南日本まで、異質なものを見るまなざしがなく等しく及んでいることについて、出身地域が日本全体の「ボカシの地帯」に当たることが背景に

なっているのではないかと述べている（赤坂「解説 遠ざかる神々の風景」野本寛一『神と自然の景観論』講談社、二〇〇六年）。著者自身はこのことをあまり意識してはいないようであるが、東にも西にも目配りしやすい地域の出身であったことが影響していることは確かであろう。

遠州の事例は、著者の幼いころからの記憶に始まり、成長してからも折々に訪れるなかで、見聞きしたことがベースになっている。牧之原市の子生まれ石の信仰の変遷などは、結果として、長年定点観測をおこなうことになったために分かったことであつたといえよう。本書に取り上げられる遠州地域の事例のなかで、荻間川流域の信仰空間の叙述はとくに詳細である。荻間川は長さが一〇・二五キロという短い川である。そこに集中的に視線を注ぎ込み、地霊との交歓をあぶりだした記述方法は特筆される。著者には、四万十川流域を取り上げた壮大な民俗誌もあるが（『四万十川民俗誌』雄山閣、一九九九年）、こうした狭い地域における信仰空間から、地霊の存在を示そうとした点は興味深い。

さらに、南信の遠山谷、伊那谷の事例も多数紹介される。これは、著者が飯田市にある柳田国男記念伊那民俗研究所の所長をしており、現在も飯田市内の民俗調査をおこなっていることが背景にある。飯田市には足しげく通っておられ、聞いたところによると、三月一日の東日本大震災発生時にも、天竜川にかかる水神橋を渡っておられたという。ともかく、現在進行形でおこなわれているこの地域の調査も、本書の大きな源泉となっていることは明らかである。1章で取り上げられた、地霊の嘆きは、過疎化が進む遠山谷での体験がもとになっている。飯田市中心部が存在する伊那谷から東へひと山越えた遠山谷には、自然とかわる智恵が豊富に残されている。したがって、遠山谷は著者に多くの感動を与えているようであるが（『遠山谷南部の民俗』飯田市美術博物館、二〇〇八年、『遠山谷北部の民俗』同館、二〇〇九年、『遠山谷中部の民俗』同館、二〇一〇年）、同時に忘れられた地霊があまりにも多いということが本書では示される。

本書には、愛知県東部の三河地方の事例も出ている

が、三遠南信地域の地霊を体系的に取り上げる形式はとっていない。筆者としては、欲張りではあるが、遠州から、南信から、三河から見ていったときに見えてくる、地霊の様相を体系的に示してほしかったと思う。柳田、折口、渋沢が見ていなかったこの地域の迫力を、著者ならば描き出すことが可能ではなからうか。

また、荻間川でおこなったような手法を、南信から遠州へと注ぎ込む天竜川の流域としてとった場合、どのような地霊の様相が見えてくるのか、興味をそそられる。地域的な差異も見えるであろうが、おそらく、地霊の今後を見据える試みにもなるのではないかと思う。筆者自身の感覚では、遠州の平野部では、子生まれ石に代表されるように、地霊が活発であるといえよう。筆者自身も、子生まれ石を訪ねたが、周辺に茶畑が広がり、茶摘体験施設、日帰り温泉施設もある台地の谷間にたたずむ子生まれ石を見ると、この地域の地霊は活力があると感じた。それに対して、筆者もしばしば訪れている三遠南信山間部では、人々が少なくなり、結果、やはり忘れられそうになっている地霊も見

受けられる。このような、少し広域の一定空間を囲い込んで、地霊の偏差も見てみたいと思う。

また、本書の特色を考えると、本書の随所で紀行文的な記述になっていることが挙げられよう。これは、反面、客観的ではないという批判もできる。しかし、そうした個所からは、著者の感動が伝わってくる。典型的なのは北五島・野崎島の記述である。著者は、野崎島へは、近畿大学民俗学研究所の調査として行っている。そもそも、平成一六年夏の北五島調査の折には野崎島まで行けなかったといい、『民俗文化』発行直前の一七年三月に野崎島へ向けて出かけていることから、著者のこの地への思いが見て取れる。この成果をまとめた『民俗文化』一七号には、野崎島の磐座、古木の写真が多数掲載されており、著者がいかに感動を覚えたのかがよく分かる。本書では、文章も写真も抑えた表現になっているが、それでも人気のない始原の森へと参入したときの著者の感動がうかがえる。実は筆者もこの島を訪ねたことがある。野崎島が無人になる前の平成七年のことであった。そのためもあって、

著者の感覚がよく理解できる。こうした感覚を伝えるために、紀行文的な文体の有効性も分かる気がする。

もう少し踏み込むと、著者がこのような表現形態を取る背景には、おそらく著者が国学院大学で文学を学んだということも関係しているのではないかと推測できる。しかし、筆者にはそれだけが理由ではないように思われる。つまり、日本の聖地には、そこへ至る道行きが大事であるという意識があるからである。典型的なのは沖縄のウタキである。ウタキには社殿はない。最終的には巨石や巨木がある、あるいは小さな石が置かれていたというだけのところもある。ウタキへ入って行くうっそうとした森を通るという参道の部分が大抵であるという指摘がある（上田篤『鎮守の森』鹿島出版会、二〇〇七年）。本土の神社にも、森をくぐりぬける参道が長く続く場合が多い。そうした日本の聖地の本質を伝えようと思うと、自身がそこに至ったときの感覚、感動を伝えないと無理である、という意識が著者にはあるのではなからうか。それは、折口信夫にも通じる感覚なのかもしれない。

ところで、本書で著者が伝えたかった思いは、筆者にもよく分かる部分も多い。著者のフィールドワークとは比べ物にならないし、同じ地域へ通っているわけではない。しかし、このところ、著者と同じような思いを感じていた。筆者の場合、ここ数年、和歌山県北部の高野山麓の山村を訪ね歩いている。この地域は、高野山の山上だけが栄え、高野山を取り巻く集落は、ほとんどが過疎化にあえぎ、限界集落となっている。

なかには、七軒しかない集落、あるいは二軒、一軒しかない集落もある。話者のなかには、限界集落ではなく、極限集落である、という方もいた。こうした集落では、神仏の統廃合がおこなわれ、細々と祭祀がおこなわれてきたが、それでも住民の高齢化にともなって祭祀をおこなうことができなくなったケースも出ている。こうした集落には、自然と結ぶ智慧がたくさん見られる。そうした智慧がなくなっていくのか、いかにすれば先人の知恵が伝わっていくのか、考えさせられることが多かった。筆者の場合には、自然とかわる智慧に注目しすぎて、忘れられていく神々へ思いをは

せることが少なかつたかもしれない。著者はそこに注目したといえよう。以前、著者から生業ばかりではなく、信仰もめくばりしないといけない、と聞いたことがあった。著者は専門医ではなく、なんでも見る町医者なのであるという。そうした著者の意識が、自然と結ぶ民俗のなかから、忘れられていく地霊を呼び起こしたということであろう。

本書のなかには、峠越えの儀礼について述べられる個所がある。峠を越えるときには、近代に至るまで、ハナを立てるなどして地霊に祈りを捧げた。著者はそれを空間的通過儀礼と呼んでいる。たとえば、著者が古代の事例として提示する神坂峠は、岐阜、長野県境の恵那山を越えていく険しい峠である。しかし、現在では、その山腹を中央自動車道の全長約八、五キロの恵那山トンネルが貫いており、多くの人々が山のこと、神のことなどまったく考えないで東濃と伊那谷を行き来している。せいぜい、このトンネルは長いな、と思うぐらいであろう。筆者はこのトンネルを通過するとき、峠の神のこと、そのまま通過する現状のことを

常々感じていた。著者はまさにこうした、現代人の忘れていく、しかし忘れてはいけないものについて訴えているのである。そうした著者の思いが伝われば、本書の目的はおおよそ果たしたことになるであろう。しかしながら、残された課題も多い。後塵を拝する者としても、地霊の探索を続け、地霊の整理をし、さらに未来へとつながる提案まで考えていかなければと痛感してゐる。

二〇二〇年二月、岩波書店、四六判、二二八頁、
三〇〇〇円＋税)